

# 智周・如理の相承に関する問題

多田修

## 序

智周（六七七〜七三三）の弟子と見られる人物に如理（生没年不詳）がいる。ただし、智周の伝記は必ずしも明確ではなく、その弟子についてはさらに不明確である。<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup>

そこで本稿では、智周と如理の関係を、如理の著作などを通して考察してゆく。

## 一

如理の名前は、『三国仏法伝通縁起』の、唐の法相宗の項目に見える。また、目録<sup>(3)</sup>では、如理の著作は中国撰述の文献に分類される。さらに、如理の著作『成唯識論疏義演』および『成唯識論演秘釈』の巻頭に「西京福寿寺沙門如理<sup>(4)</sup>」と記される。

以上から、如理は中国・唐代の法相宗の人物であることが確認できる。

なお、『仏祖統紀』<sup>(6)</sup>に「正堂如理法師」の名が見えるが、これは高麗の義天（一〇五五〜一一〇二）などよりも後の人物なので、別人である。この他、『法相灯明記』には「理和尚」の名前が見える。これは如理を指すと指摘されている。<sup>(8)</sup>

## 二

上記の資料には如理の相承が示されない。そこで、如理の著作である『成唯識論疏義演』（以下『義演』と略称）・『成唯識論演秘釈』（以下『演秘釈』と略称）に、如理の相承に関する手がかりを求めた。

『義演』・『演秘釈』は、様々な人物・文献に言及している。そこで、これらに見られる中国の人物・文献とその数を調べた。人物を基準に集計すれば、次頁の通りとなる。

ただし、『義演』は『成唯識論述記』（以下『述記』と略称）の註釈書であり、これを含めると極めて煩瑣となるため、『述記』を含めずに集計した。同様に、『演秘釈』においても『成

唯識論演秘』（以下『演秘』と略称）を含めていない。また、その人物あるいはその人物の著作と特定できないものもあるが、可能性が高いと判断できるものは含めた。

その結果、如理の現存の著作では、基と智周を取り上げることがとりわけ多いことが判る。

〔『義演』で言及される中国の人物〕

人名	回数	備考
基	89	
智周	78	
円測	34	
哲	17	宗哲か
太（泰）	17	神泰あるいは靈泰か
玄奘	15	
慧沼	3	
順憬	3	
慧愷	2	
丘法師	1	浮丘か
総法師	1	
敬宗法師	1	
北川有法師	1	
因法師	1	
照法師	1	
茂法師	1	
西門	1	西明（円測）か
逝法師	1	哲か
胎法師	1	太（泰）か

〔『演秘釈』で言及される中国の人物〕

人名	回数	備考
基	39	
智周	5	
孔子	3	
公洋高	3	
良谷	3	穀梁赤か
左丘明	2	
崇福法師	2	
玄奘	2	
円測	1	
北川大徳	1	
孔丘明	1	左丘明か
宗論法師	1	崇福法師か

三

『義演』では、『演秘』からの引用と明示しないものの、『演秘』の文言を利用したことが明らかである箇所がしばしば見られる。例として、『演秘』の冒頭と『義演』の冒頭を比較した。文言が一致する箇所には傍線を引いた。

『演秘』巻一本

疏「機有三品不同」者不定姓人婦「於仏法」智解淺深三時悟異名曰三機。非一定別三。唯对不定立三時故。  
疏「由斯二聖互執有空」者問唯望不定立有三時。

何有<sup>二</sup>三聖互執<sup>一</sup>空有<sup>一</sup>。答豈言<sup>二</sup>不定<sup>一</sup>唯祇一人人既有<sup>レ</sup>多悟亦前後。前後各以<sup>二</sup>所証<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>是互執何失。又縱一人執前後別對<sup>二</sup>執不同<sup>一</sup>亦得<sup>レ</sup>稱<sup>レ</sup>互。

疏「解深密經說<sup>二</sup>唯識<sup>一</sup>」者按<sup>二</sup>彼經第一<sup>一</sup>云「廣惠。當<sup>レ</sup>知。於<sup>二</sup>六趣生死彼彼有情<sup>一</sup>、或在<sup>二</sup>四生<sup>一</sup>身分生起於<sup>二</sup>中最初一切種子心識成就<sup>一</sup>。廣惠。此識名<sup>二</sup>阿陀那<sup>一</sup>亦名<sup>二</sup>阿賴耶<sup>一</sup>亦名為<sup>レ</sup>心。為<sup>二</sup>依止<sup>一</sup>故六識身軀如<sup>レ</sup>依<sup>二</sup>瀑水<sup>一</sup>而有<sup>二</sup>浪生<sup>一</sup>依<sup>二</sup>淨明鏡<sup>一</sup>有<sup>レ</sup>影像起<sup>上</sup>」。

『義演』卷一本

疏「機有<sup>二</sup>三品不同<sup>一</sup>」者意說<sup>二</sup>不定性人婦<sup>一</sup>仏法僧<sup>一</sup>智解淺深三時悟異名曰<sup>二</sup>三機<sup>一</sup>。非<sup>レ</sup>定別有<sup>二</sup>三人<sup>一</sup>名<sup>二</sup>三機<sup>上</sup>也。何以故。以下<sup>レ</sup>唯對<sup>二</sup>不定性<sup>一</sup>立<sup>二</sup>三時<sup>上</sup>故。即如<sup>二</sup>橋陳如等<sup>一</sup>。從<sup>レ</sup>如等從<sup>レ</sup>始至<sup>レ</sup>終具<sup>二</sup>三根<sup>一</sup>也。故云<sup>レ</sup>機有<sup>二</sup>三品不同教<sup>一</sup>亦<sup>二</sup>三時有<sup>上</sup>異。

：(中略)：

疏「由<sup>二</sup>斯<sup>一</sup>三聖互執<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>」者問唯望<sup>二</sup>不定性<sup>一</sup>立<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>三時<sup>一</sup>。何有<sup>二</sup>三聖互執<sup>一</sup>空有<sup>一</sup>。答豈言<sup>二</sup>不定<sup>一</sup>唯一人人既有<sup>レ</sup>多悟亦前後。名以<sup>二</sup>所証<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>是互執何失。又縱一人執前後別對<sup>二</sup>執不同<sup>一</sup>亦得<sup>レ</sup>稱<sup>レ</sup>互。

：(中略)：

疏「解深密經說<sup>二</sup>唯識<sup>一</sup>」者按<sup>二</sup>彼經第一<sup>一</sup>云「廣八慧。應<sup>レ</sup>知。於<sup>二</sup>六趣生死彼彼有情<sup>一</sup>隨<sup>二</sup>彼彼有情衆中<sup>一</sup>或在<sup>二</sup>四生<sup>一</sup>身分生

智周・如理の相承に関する問題(多田)

起於<sup>レ</sup>中最初一切種子心識成就。廣慧。此識名<sup>二</sup>阿陀那<sup>一</sup>亦名<sup>二</sup>阿賴耶<sup>一</sup>亦名為<sup>レ</sup>心。為<sup>二</sup>依止<sup>一</sup>故六識身軀如<sup>レ</sup>依<sup>二</sup>瀑水<sup>一</sup>而有<sup>二</sup>浪生<sup>一</sup>依<sup>二</sup>淨明鏡<sup>一</sup>有<sup>レ</sup>影像起<sup>上</sup>。

かなりの文言が合致する。これと同様の例は、たびたび見られる。『義演』が『演秘』の影響を強く受けていることは明らかである。

なお、慧沼門下の人物として、智周以外に道猷、義忠、道邑<sup>(1)</sup>などが知られる。しかし、『義演』や『演秘』には、これらの人名やその著書名は確認できない。

#### 四

『述記』には異本がかつて存在し、『演秘』や『義演』がそれをたびたび用いていたことが指摘されている。<sup>(12)</sup>例えば、『演秘』には以下の文がある。

『演秘』卷二本

疏「<sup>二</sup>不能起<sup>一</sup>因有<sup>二</sup>三<sup>一</sup>」

現行の『述記』にはこの文が見あたらないが、『義演』は次のように述べる。

『義演』卷二本

有疏本云「述曰、<sup>(13)</sup>下能起因有<sup>二</sup>三<sup>一</sup>」

これは、智周と如理が同系の本を使用していたことを意味する。

結

如理の現存の著作(とくに『義演』)には、以下の特徴が見える。

- ・基と智周に言及することがとりわけ多い。
- ・智周の同門と見られる人物に言及する文が見られない。
- ・『義演』には、『演秘』の文言と類似するものがたびたび見られる。
- ・『義演』には、『演秘』が引用したものと同系の『述記』の異本が使用されている。

これらの点から判断すれば、如理は智周の弟子と見て差し支えない。

なお、『義演』<sup>15</sup>には、基の説が誤りである可能性を示唆した文がある。日本の法相宗は「必ずしも基の正統に縛られない自由な多面性を持っていた」<sup>16</sup>と指摘されるが、この傾向は唐においてすでに存在していたようである。<sup>17</sup>

1 智周の伝記に関する近年の研究では、師茂樹「撰揚智周伝について」<sup>2</sup>、三の問題「師承関係を中心に」(『印度学仏教学研究』四八一—、平成一年)が詳しい。

2 富貴原章信『日本唯識思想史』(大雅堂、昭和一九年)一二四頁は「撰陽の弟子と見られる人に如理がある。」<sup>3</sup>と言い、鎌田茂雄『中国仏教史』(岩波書店、昭和五三年)二四二頁は智周について記す際に「弟子と見られる如理」と述べて、断定を

避けている。また、『中国仏教人名大辞典』(上海辞書出版社、一九九九年)二五八頁は如理を慧沼の弟子とする。

3 凝然『三國佛法伝通縁起』巻上(仏全一〇一・一二下)

4 円超『華嚴宗章疏并因明録』(大正五五・一一三五上)、平祚『法相宗章疏』(大正五五・一一三九中)

5 『成唯識論疏義演』巻一本(新纂正統四九・四七九中)、『成唯識論演秘』巻一(新纂正統五〇・一上)

6 志磐『仏祖統紀』巻二四(大正四九・二五五上)

7 慚安『法相灯明記』(大正七一・四九下)

8 富貴原前掲書二八〜二八二頁

9 『成唯識論演秘』巻一本(大正四三・八一—上)

10 『成唯識論疏義演』巻一本(新纂正統四九・四七九中〜四八〇上)

11 結城令聞『唯識学典籍志』(大蔵出版、昭和六二年)三二五〜三二六頁は、永超『東域伝灯目録』(仏全一・三七下)に「邑師 基資」とある(大正蔵経の該当箇所では「邑師基本」となっている)ことにもとづいて、道邑を基門下と見る。しかし、

深浦正文『唯識学研究(上)』(永田文昌堂、昭和二十九年)二五八頁は、この「邑師」を道邑と見ることに疑問を呈する。

12 中村瑞隆『成唯識論演秘解題』(『国訳一切経論疏部一八上』、大東出版社、昭和五八年)

13 『成唯識論演秘』巻二本(大正四三・八四—下)

14 『成唯識論疏義演』巻二本(新纂正統四九・五二—中)

15 『成唯識論疏義演』巻七末(新纂正統四九・六八三下〜六八四上)

16 末木文美士『日本法相宗の形成』(『仏教学』三三、平成四年)

17 師前掲論文には、智周にもこの姿勢が見えると指摘される。

また、長谷川岳史『撰大乘論』の法身説についての慧沼の見解（『仏教思想文化史論叢』平成九年）では、慧沼が法身に關して基と異なる見解をとっていたことが指摘されている。

（キーワード） 智周、如理、『成唯識論疏義演』、『成唯識論演秘  
釈』

（龍谷大学非常勤講師）

掲載されなかった諸氏の発表題目（三）

知識と知識寺

——河内知識寺を主にして——

辻井 清吾（桜美林大学）

四天王寺藏板絵聖徳太子絵伝

——絵堂絵伝の復元的考察——

南谷 恵敬（四天王寺国際仏教大学）

四無量心の構成的意義について

松田 慎也（上越教育大学）

卍山道白における『先代旧事本紀大成経』所説引用の問題

佐藤 俊晃（駒澤大学大学院修了）

## 110. A Problem of the Relationship between Zhizhou and Ruli

Osamu TADA

It is said that Ruli 如理 was a disciple of Zhizhou 智周. But quite a few points are not definite with regard to Zhizhou's disciples. Therefore, I examined the relationship between Zhizhou and Ruli from Ruli's writings, etc. As a result, four features are found in Ruli's writings, especially in the *Chengweishilun-shu-yiyan* 成唯識論疏義演 (hereafter, *Yiyan*).

- i) There are many references to Ji 基 and Zhizhou.
- ii) There is no reference to Huizhao's 慧沼 disciples except Zhizhou.
- iii) In *Yiyan*, there are many sentences similar to ones in the *Chengweishilun yanmi* 成唯識論演秘 (hereafter, *Yanmi*).
- iv) *Yiyan* quoted from a variant text of the *Chengweishilun-shuji* 成唯識論述記 used in *Yanmi*.

From these points, it is probable that Ruli was a disciple of Zhizhou.

## 111. On Chengguan's Views of Dharmatā and Buddhatā

Wen-liang ZHANG

In the view of Chengguan, there is a distinction between *dharmatā* and *buddhatā*. *Dharmatā* means the *sūnyatā* of all dharmas, which exists in all sentient beings as well as non-sentient beings. *Buddhatā*, in contrast, embraces both *sūnyata* and *prajña*-nature, and thus exists only in sentient beings. Based on this distinction, Chengguan criticizes views that do not admit this distinction, such as "Non-sentient beings have *Buddhatā*" and "Non-sentient beings can become Buddhas." Chengguan's separation of *dharmatā* and *buddhatā* sits in diametrical opposition to Zhanran's identity of *dharmatā* and *buddhatā*. The roots of this opposition stem from the following fact. Whereas Chengguan, following the standpoint of suchness or interdependent arising, contends that the dharmas (forms/*xiang*) of interdependent arising differ from suchness (nature/*xing*), Zhanran, sticking to the position of universality of interdependent arising (*ti pian*), maintains that there is no distinction